

# 令和六年 上野天神祭 横車(だんじり)

一番 三明 SANMEI さんめい

FUKUCHO 福居町



しるし 三明嶺山 (さんめいのぼりやま)  
鶴の文字は「福居町」。この文字は松尾芭翁の筆ではないかと伝えられています。織は緋羅紗。作成当時の織が保存されていたので、台車を平成2年（1990）に制作しました。

だんじり 三明 (さんめい)  
日・月・星 (天体の表現)。欄縁の金具は三重県指定文化財。地車、せり揚げ万力をもつて綱あげする工法。車体車輪を構木で受け弾性のある工法を採用。

屋根 唐破風、とばめ板に菊菱の絵。底 (ひさし) には、銅鏡錦 (どうぎん) の星宿 (星座) 屋根のせり上げを現在も伝承。

側面 前は金箔の日、後ろは銀箔の月、前述の星宿と合わせて「日・月・星」をたんじりの象徴としている。

天井 格天造り。金箔の地に極彩色の扇面花鳥図。

天幕 雲龍図 (刺繡、伝「貴名海屋」(ぬきないかくね)の下絵)。

水引幕 三十六歌仙図の幕と西園雅集団の幕がある (ともに刺繡)。

胴幕 虎竹図 (刺繡、伝「円山応挙」の下絵)。虎の刺繡の厚みや、虎の表情が見所。

欄縁 飾金具二十四個は、三重県指定文化

四番 離刀鉾 NAGINATABOKO なぎなたぼこ

SHINMACHI 新町



しるし 白楽天 (はくらくてん)  
中国の詩人、白楽天像の大作。嘉永4年 (1851) 年、京都丸屋利兵衛の作。近年、松の木を添える白楽天像に形容を変え、衣裳も新調しました。

だんじり 離刀鉾 (なぎなたぼこ)  
見送幕墨書詔から天明3年 (1783) の頃、創建されたと考えられており、唐破風屋根中央に、刀を立てた姿は豪華な幕と相まって壯觀です。

屋根 唐破風。

眼象 新の字の浮彫り。足元に雲形の彫刻。

天幕 牡丹の透かし彫り。

天井 前後は旭日に鳳と凰、左右は麒麟遊戯の図 (緋羅紗)。裏面は鳥獸花樹図 (緋羅紗)。

水引幕 富士の裾野の巻狩 (刺繡)。安政4年 (1857) に京都の鍛錬師宮崎屋房三郎にて新調。

二番水引幕 (前) と胴袖幕 雲龍波涛文圖 (刻糸)。19世紀後期のもの。

前幕 黒石公に張良が首を捧げる図 (緋織)。

欄縁 左、松竹梅に鶯。右、松竹梅に飛雀 (左右は緋羅紗)。池田桂巻下絵)。

菅公千年大祭 (1902) を記念して新調。

隠子 祇園囃子。囃子方の組織を梅香社と称しています。

五番 鐵英剣鉾 TETSUEIKENBOKO てつえいけんぼこ

MUKAIJIMACHO 向島町



しるし 月鉾 (つきほこ)  
平成2年 (1990) に從来だんじりの屋根にそびえた「月鉾」を原型に、濱邊萬吉画伯の意匠により復興されました。

だんじり 二東 (にとう)  
「二東」は鍛冶町の古い町名の二之東町から名付けました。本来は三日月形の鉾を建て、「月鉾」と称します。新復興したるしを「月鉾」としたため、それとの混同を避ける為新たに「二東」をだんじりの名称としました。(現在はどちらの名称も使っています。) 「二東」の評価を上げたのは何といつても県の文化財に指定されている見送幕「雲竜文」です。明時代 (1368~1644) の刻糸 (中国のさわめて精巧な高級織物、織錦) で孔雀の羽毛を混ぜて織られています。

屋根 唐破風。化粧梁のとばめ板に牡丹に唐唐草。

眼象 三日月紋。

懸天 麦牡丹の透かし彫り。

天幕 前面が「鳳凰に桐図」、左右・後面が「御殿鳳」(ともに緋羅紗)に刺繡)。

水引幕 飲中八仙図 (刺繡)。明治19年 (1886)。

胴幕 篤 (まがき) に菊図 (刺繡)。陶淵明

の飲酒詩「采菊東籬下悠然見南山」にならう。

前幕 白象に唐子 (平成15年 (2003) に復元新調) (刺繡)。

後幕 龍虎 (吳道子、陳平) (刺繡)。

見送幕 雲龍文。中國明時代 (1368~1644) (織錦)。孔雀の毛を混ぜて織ったもので、三重県指定文化財です。現在、だんじり会館にて常設展示しています。祭礼巡行に使用の見送幕はこれを基に、昭和37年 (1962) 新調しました。

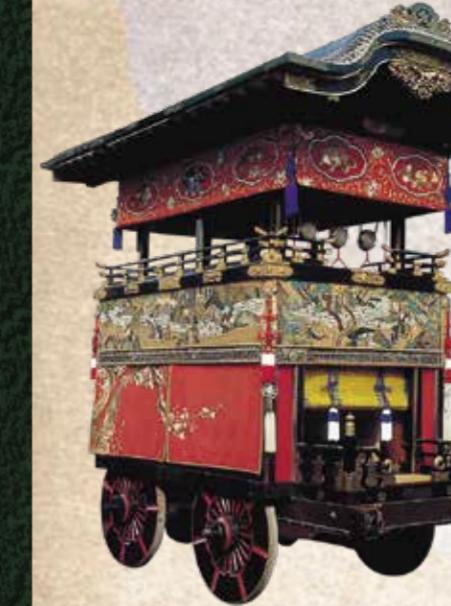
隠子 祇園囃子。囃子方の組織を二東社とします。

六番 桐本 KIRIMOTO きりもと

HIGASHIMACHI 東町

三番 花冠 KAKAN かかん

NISHIMACHI 西町



しるし 琥珀 (かっこう・課鼓)  
文久3年 (1863) 9月に再調した。高木長雄の記した由来書には別文のいわわれがあります。

西町しるし「课鼓」のいわれ

昔、殿様の政治を諫める爲住民が太鼓をたたいていました。殿様の政治がいけば諫めることなく、太鼓の上に鶴が止まって、昔がはえるさまは世の中が平穡である。その故事を引用して、形どったもの。

だんじり 花冠 (かかん)  
鼓を身につけて踊る课鼓舞の花冠にちなんで名づけられました。宮殿を擬した華麗な廉の間があるだんじりです。毛影打出しに本鎧金された飾金具が多く使われています。特に欄縁・勾欄・勾欄の金具は水引幕の細かな蘭亭曲水の宴の織と共に「花冠」の存在感を際立たせています。

屋根 唐破風。柱6本。

眼象 銅鉢紋。破風飾金具に同じ紋所を表わす。

懸天 牡丹の透かし彫り。

天井 織物張り。

天幕 靈駄百卉 (百卉: もろもろの草) (緋羅紗地に刺繡)。

水引幕 蘭亭曲水の宴。東晋の永和9年 (353) の賢聖41人を描いた密画 (刺繡)。

胴幕 梅 (刺繡、伝「応挙十哲」渡辺南岳

下絵)。

後牛 (刺繡、伝渡辺南岳下絵)。

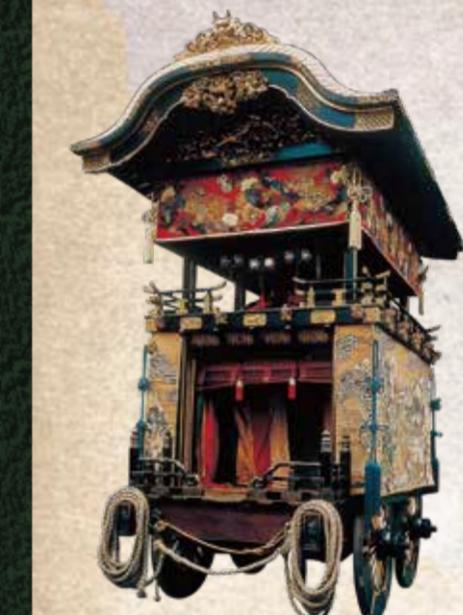
勾欄 金具は手影り打出し、本鎧金。文政2年 (1819) の銘あります。上段勾欄。

下段、擬宝珠勾欄。廉の間。

隠子 祇園囃子。

四番 離刀鉾 NAGINATABOKO なぎなたぼこ

SHINMACHI 新町



しるし 白楽天 (はくらくてん)

中国の詩人、白楽天像の大作。嘉永4年 (1851) 年、京都丸屋利兵衛の作。近年、松の木を添える白楽天像に形容を変え、衣裳も新調しました。

だんじり 離刀鉾 (なぎなたぼこ)

見送幕墨書詔から天明3年 (1783) の頃、創建されたと考えられており、唐破風屋根中央に、刀を立てた姿は豪華な幕と相まって壯觀です。

屋根 唐破風。

眼象 新の字の浮彫り。足元に雲形の彫刻。

天幕 牡丹の透かし彫り。

天井 前後は旭日に鳳と凰、左右は麒麟遊戯の図 (緋羅紗)。裏面は鳥獸花樹図 (緋羅紗)。

水引幕 富士の裾野の巻狩 (刺繡)。安政4年 (1857) に京都の鍛錬師宮崎屋房三郎にて新調。

二番水引幕 (前) と胴袖幕 雲龍波涛文圖 (刻糸)。19世紀後期のもの。

前幕 黒石公に張良が首を捧げる図 (緋織)。

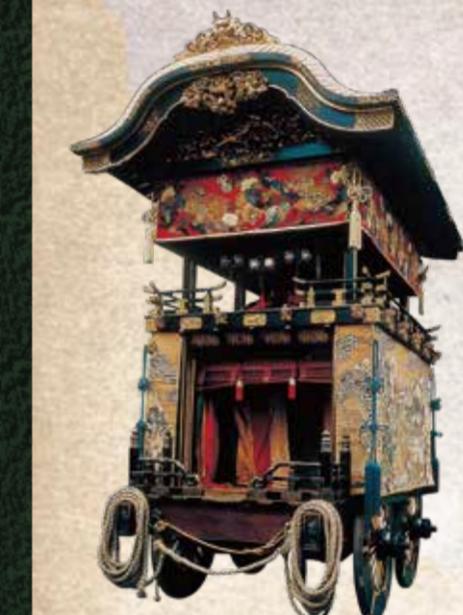
欄縁 左、松竹梅に鶯。右、松竹梅に飛雀 (左右は緋羅紗)。池田桂巻下絵)。

菅公千年大祭 (1902) を記念して新調。

隠子 祇園囃子。囃子方の組織を梅香社と称しています。

五番 鐵英剣鉾 TETSUEIKENBOKO てつえいけんぼこ

MUKAIJIMACHO 向島町



しるし 日・月・扇 (じつ・げつ・せん)

平成元年 (1989) に濱邊萬吉画伯の意匠により再興されました。天神様は日月の運行を司る神様で中国に由来する采配の具「唐扇」をあしらっています。行列曳行時、唐扇はゆっくり回転しながら巡行します。

だんじり 鐵英剣鉾 (てつえいけんぼこ)

英は花房の意、従つて花鉾を意味する。花鉾は宝曆6年 (1756)。現在の鉄英剣鉾は安政6年 (1859)。

屋根 てり破風。

前額 「探溟 (たんめい)」暗がりを探り。

後額 「剪莽 (せんぼう)」草を刈る。

眼象 梅鉢紋。

天幕 丸花露図 (刺繡)。

水引幕 波之鯉図 (刺繡)。

胴幕 漢方尚齒図 (刺繡)。

前幕 凤凰額群仙琴鶴図 (刺繡)。

見送幕 祇園囃子。

隠子 はのいもので、四神 (中国の神話で天の四方の角を司る靈獸、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武) を鎮めるもので鉾車の伝統的な様式です。屋根上に立てる劍は、足掻えの儀には銀の劍。本祭には金色の劍を飾ります。

六番 桐本 KIRIMOTO きりもと

HIGASHIMACHI 東町



しるし 逆熨斗 (さかのし)

天保11年 (1840) に発行された天神祭の版画「伊賀上野天満宮祭九月廿五日行列略記」に扇面に文字の「のし」を逆さに添えた図が残っており、これに基づき昭和53年 (1978) に濱邊萬吉画伯の匠業設計により文字から飽熨斗に改め復興しました。

だんじり 桐本 (きりもと)

神叢に生い茂る桐の大樹に拠りどころを得たものである。文政10年 (1827) 9月新調。

屋根 唐破風、妻「前」雲に麒麟、「後」波に犀の影り物。柱6本。

鬼板 鬼の面。

懸天 菊花の透かし彫り。

天井 切こまの松竹梅の蒔絵。人形師・筒井久造。

天幕 牡丹に唐獅子 (縫取刺繡)。

胴幕 蘭亭曲水の宴 (刺繡、伊賀の画家大北堀堂の下絵)。

簾の間 だんじり下層正面、天井には菊花の蒔絵。擬宝珠勾欄の張り出し。

七番 小蓑山 KOMINOYAMA こみのやま

NAKAMACHI 中町



しるし 菊慈童 (きくじどう)

現存する上野天神祭のしるしで庄屋。享和2年 (1802) 菅公九百年前作機として作られた伝えあります。しるしの見送幕は中国明時代 (1368~1644) の官服で作られたといわれています。(群青、赤、黄、紫等々の真向きの龍の蝦夷図) 以前はだんじりの見送幕であった。

だんじり 其神山・葵鉾 (きしんざん・あおいぼこ)

いかなければ、そのかみやま (其神山) のあふいぐさとはしはふれどもふたばなるらん

「其神山」は上賀茂神社の枕詞で「葵草」は賀茂祭の葵蔓で「いかなければ」の起句を伊賀と結びつけたといわれています。

屋根 てり破風。